25PB-pm278

医系総合大学における学部連携による初年次在宅訪問実習の実施

○大幡 久之[1], 田中 一正[1], 小倉 浩[1], 刑部 慶太郎[1], 吉川 祐介[1], 稲垣 昌博[1], 平井 康昭[1], 天野 弘美[1], 倉田 知光[1], 亀井 大輔[2], 大林 真幸[2], 木内 祐二[2]（[1]昭和大富士吉田教育部, [2]昭和大薬）

【目的】昭和大学は、医・歯・薬・保健医療学部（看護学科、理学療法学科、作業療法学科）からなる医系総合大学であり、1 年次（1 学年約 570 名）は山梨県富士吉田市にて全寮生活を送っている。平成 27 年度から、全学的な取り組みとして、「患者と家族のナラティブを支援」する「在宅チーム医療の担い手の育成」を目的とした段階的な在宅医療学習カリキュラムの構築を目指し、1 年次に在宅訪問実習を必修・4 学部連携で行っている。今回、2 年目となる平成 28 年度の取り組みについて昨年度と対比して報告する。

【方法】昨年同様、富士吉田市の協力を得て、地域在宅あるいは高齢者住宅にお住まいの方々のご協力の下、平成 28 年 9 月 5 日～15 日の平日（9 日間）、3-5 名×120 グループが在宅訪問実習を行った。訪問に当たっては、事前に学生が、訪問先までの公共交通機関などを用いた訪問ルートの作成、周辺施設の確認、訪問時のトラブル事例への対応などをグループで検討し実施計画案を作成した。

【結果および考察】本年度は昨年度の反省から「ナラティブ」に視点を向ける工夫を前期のPBLチュートリアルや事前学習を通して行ってきており、実習後のアンケートでは、「ナラティブとは何かを共通認識できた。」と回答した学生が昨年の66%から87%へと増加した。「周辺の様子を理解できた」（91%）、「高齢者の気持ちが理解できた」（92%）「実習は楽しかった」（84%）と回答した学生はいずれも昨年より1割以上増加した。一方、受け手の高齢者も昨年同様約9割が本実習は面白く、学生の態度は良好と感じ、約8割は次回も参加したいと回答した。以上から、昨年度にも増して学生および受け手側の満足度は共に高く、「ナラティブ」についての認識を高める改善策も有効であったと考えられた。